

会議参加報告：ラピタ土器を中心とした国際フィールドスタディケース
—中央研究院主催オーストロネシア語族コネクション事業

早川理恵子
(インド太平洋研究会)

1. 概要

2026 年 1 月 20-21 日、台湾の中央研究院で開催された Workshop on the International Field School System and the Sustainability of the Lapita Pottery Online Database に参加した。同ワークショップは Austronesian Connections: A New Horizon for Interdisciplinary Research (「南島連結：跨領域研究之新航向」學術發展平台計畫) という大きな事業の一部である事は後述する。

私の太平洋島嶼国における学術研究分野の一つは開発理論を応用した情報通信政策であるが、博士論文では衛星やインターネットなどの近代的技術が太平洋の島々を最初に結んだわけではないことを説明するためにオーストロネシア語族コネクションを議論している (Hayakawa 2017)。そして私がこのようなオーストロネシア語族の存在に詳しくなったのは 90 年代半ばから、ハワイビショップ博物館の故篠遠善彦博士と「太平洋文化財人材育成事業」を立ち上げ、博士の研究フィールドである仏領ポリネシアからメラネシア、ミクロネシアへと展開させた経験があるからだがこれも詳細は後述する。

2. ワークショップ

今回のワークショップには太平洋文化財人材育成事業を通して顔馴染みとなったカナダの Dave Burley 教授 (Simon Fraser Uni)、バヌアツの Stuart Bedford 教授 (ANU)、ニュージーランドの Christophe Sand 博士 (ニュージーランド政府)、オーストラリアから Ben Shaw 博士 (ANU)、そしてニュージーランドから Glenn Summerhayes 教授 (Otago Uni.) が参加した。たまたま台湾に来ていた洪曉純博士 (ANU) にもお会いすることができた。同博士は、私が主催するインド太平洋研究会でまさにオーストロネシア語族コネクションとインド太平洋をテーマに 2023 年与那国で開催したワークショップにお招きし「黒潮とともに：先史時代の八重山諸島、台湾、フィリピン、マリアナ諸島の交流」を講演いただいた。

今回の Workshop は長年ラピタ土器データベースを作成している中央研究院の邱斯嘉博士 (Research Fellow, Chief Coordinator of the Archaeology Department) が主催。今までの成果とデータベース利用に関する今後の見通しについて議論がされた (Chiu, et al. 2024)。

2 日目は公開形式で、國立台灣大學、國立清華大學、國立成功大學等の研究者約 30 名近い参加があり前記の外国招聘者以外に國立成功大學趙金勇教授、國立台灣大學江芝華教授が International Field School System について現場経験を元に発表があった。国によって違う許可制度、手続きの複雑さ、海外から集まる学生たちの学術指導だけでなくフィールドで

の行動管理など難題が指摘された。しかしその中から太平洋島嶼国出身の考古学者が誕生したケースも紹介された。

3. 発掘現場視察

台北の中央研究院から場所を鹿湾に移動し、1月22日は国立成功大学鍾癸風教授が指導する彰化県での発掘現場を視察。23日には高雄、旗山に移動し、大阪大学から博士号を得た現在國立台灣大學の盧柔君教授が指導する発掘現場を視察。両発掘調査には数十名の学生が参加していた。海外から権威ある考古学者の一行が来るということで非常にエキサイトしており、ぜひ意見交換をとのことであった。私は地元の人々の関心や理解を聞いたが、支援はあっても参加や理解までには繋がらないようだ。発掘内容が観光資源にでもなれば一気に関心が高まるであろう。旗山は10年前から「役に立たない土地」を政府がゴミの埋め立て場にする計画があり、地元のコミュニティが立ち上がって反対運動を展開し、豊かな歴史があることを証明しようとしている。しかし高齢化が進み、若者が離れて行く現実がある。夕方、屏東県霧台郷のルカイ村に移動した。

4. 原住民の視点とオーストロネシア語族コネクションの温度差

ルカイ村を訪ねるのは20年ぶりである。今回同様中央研究院のアレンジだった。まさか再度訪ねることができると思っていなかった。前回私は体調を崩し麓で一人みんなを待っていた。ルカイ村のことは何も覚えていないのだが日本語で話しかけてきた老婆の姿とその言葉だけが記憶に残っていた。今回は頭目の家に一泊し、ゆっくりと村、そして博物館を訪ねることができた。なお、台湾の各原住民部落には日本時代に設置された警察の検問所が今もあり、村の安全を守っているのだそうだ。

一行を率いる邱斯嘉博士に、台湾原住民と台湾政府が推進するオーストロネシア語族政策の関連性を聞いたところ、非常に興味深い意見が聞けた。台湾原住民は太平洋芸術祭など国際的な会議や祭典に参加する機会が多くあるが、台湾の自分の村に戻ってきてそのギャップに悩むという。ルカイ村の博物館で学んだことは、8つある村の言葉が消えていくことへの危機感と対策であった。小学校までルカイ村にあるが、若者はどんどん外に出て行ってしまう。ルカイ語を読めても発音できないという。

インド太平洋に広がるオーストロネシア語族の地理空間を各地のオーストロネシア語族の人々が共有しているわけではない。それを見つけたのは欧米の航海者、研究者たちである。太平洋島嶼国の人々も同様に、インド太平洋、すなわちオーストロネシア語族への理解や関心はそれほど高くない。それではオーストロネシア語族コネクション事業と台湾の原住民はどのようにつながるのか？この点については最後に述べる。

「霧台郷凱族文物館」は政府の支援を受け2000年に開設された。2005年には同館を紹介するパンフレットが作成され、20年後2025年にデザインなどを改め再版。日本語版もある。同書の構成は以下の通り。

郷長のあいさつ／高知で暮らす民族／周辺交通マップ／魯凱の収藏品／原郷の採集部落の組織と貴族制度／衣服と装飾／伝統的な生活様式／日用の道具／信仰と伝説／祭典と儀式／集落の建築物／アート／霧台への思い／ルカイ巡礼

近年の日本人によるルカイ族研究には笠原政治氏の論文が多数あり、1994年には日本順益台湾原住民研究会が発足し研究誌の発行が継続している（笠原 2022）。訪問した博物館の彫刻家は 2011 年 11 月 22-24 日に同志社大学の国際シンポジウム「過去の記憶」に招待された際の文書を見せてくれた。同大学の岡林洋教授がルカイの彫刻芸術を調査している。ルカイ村を訪ねた後、カナダ、オーストラリア、ニューカレドニア、バヌアツ、ニューギニアから集まったラピタ土器考古学者たちは帰途についた。私は邱斯嘉博士の特別なお配慮でさらに台南に二泊し、国立台湾歴史博物館と八田ダムを訪ねた。中央研究院の Nicholas Hogg 博士が同行された。

5. 篠遠博士の「太平洋文化財人材育成事業」とは？

ここで私が篠遠善彦博士と立ち上げた「太平洋文化財人材育成事業」について若干敷衍しておきたい。私は太平洋島嶼国に特化した基金の運営を 90 年代初頭から 30 年近く、事業方針策定から実際の事業開発運営まで一人で担当してきた。90 年代半ばに篠遠博士からタヒチでの考古学調査助成申請の打診があったので「考古学研究に助成金は出ないが、島の人々に裨益する内容であれば、そして仏領は基本的に対象外なので独立島嶼国に展開していく計画を持っていれば審査対象になる。加えて日本人研究者が参加できる道筋も。」と伝えた。太平洋島嶼は民族学の宝庫であるが資金が先進国の研究者ではなく、島の人々に直接裨益する事業方針に定めていた。篠遠博士は私の提案通り、というよりも既に遺跡を地元の人々と共に復元し観光資源にする等の活動実績があり、仏領ポリネシアでの博士の活動をメラネシア（パプアニューギニアとバヌアツ）とミクロネシア（パラオとポナペ）まで拡大させた。よって今回中央研究院が主催する「ラピタ土器を中心とした国際フィールドスタディケース」は篠遠博士と私が立ち上げた事業の継続的發展の結果であると同時に、国分直一博士や高宮廣衛博士とも親しかった篠遠博士が常に関心を寄せていた台湾と沖縄のオーストロネシア語族の繋がりを再確認する機会でもあった（篠遠 1994）。具体的な成果物として Stuart Bedford 教授 Christophe Sand 博士が夫々ラピタ、メラネシア考古学について一般向けの冊子（英仏）を出版している（Sand 2020, Bedford 2010）。

6. 台湾の歴史言語空間の特殊性とオーストロネシア語族

私の関心が日本統治時代の後藤新平や新渡戸稲造の台湾での遺産にある事を邱斯嘉博士に伝えたところ、台南にある国立台湾歴史博物館訪問と同館長張隆志博士との面談をアレンジしていただいた。私の台湾への関心は常に専門分野の太平洋島嶼国からの視点である。一つはオーストロネシア語族拡散の出発点としての台湾。そしてもう一つは矢内原忠雄の

『南洋群島の研究』（矢内原 1935）を出発点に彼此 10 年以上学んでいる新渡戸、後藤に連なる日本の植民政策が実施された場所としての台湾である。さらに新渡戸は日本人がオーストロネシア語族（マレイ系）である事を頻繁に述べている（Nitobe 1912、ベルツ 1973）。そのオーストロネシア語族である台湾原住民の研究は鳥居龍三はじめ日本人が植民地時代に基盤を作ったのである。

さて台湾の歴史をはじめとする言語空間は 40 年近く続いた戒厳令との関係を無視して理解できない。張隆志博士によると本当に自由に議論できるようになったのは 2004 年からだという。同博物館は広大な敷地にあり、さらに台湾民主化の歴史に重点を置く建物を増築する計画だという。台湾訪問前にこの博物館の創設に多くの議論があった事を知ったのだが、その結果が歴史のヒーローを置かない「みんなの博物館」というテーマに落ち着いたことに不思議と安堵感を得た。例えば霧社事件に関する展示では関連する村々の違った意見を紹介している。「歴史は現在と過去との間での尽きることのない対話である」（カー 2022）という基本的な歴史学の姿勢を知れば「歴史認識」で白黒つけようとする日本の言論空間の限界をこの博物館は論してくれるだろう。展示は最新のデジタル技術が駆使され子供から大人まで楽しめる。同館の学芸員が 2 時間に渡り説明してくれたが、あっという間であった。少なくとも一日を割いて訪れる場所である（張 2021）。

7. オーストロネシア語族コネクション事業

邱斯嘉博士が主催する今回のワークショップが国家科学及技術委員会の資金提供を受けた 3 年間の大型事業 Austronesian Connections: A New Horizon for Interdisciplinary Research の一部である事を台湾訪問直前に知った。この事業の総括責任者は中央研究院の郭佩宜博士である。彼女の博士論文はソロモン諸島マライタ州 Langalanga 部族であり、台湾太平洋研究学会を 2011 年に創設し、台湾の太平洋研究、オーストロネシア語族研究を牽引する人物だ（Guo 2019）。私の関心と彼女の関心が一致していたようで話を聞きたいとの事。2017 年に私が 2 つの議連に講師として呼ばれた際、いかに安倍総理のインド太平洋構想とセキュリティダイヤモンド構想にオーストロネシア語族と海洋安全保障を繋げたかを説明した。なお、横道に逸れるが須藤健一先生から拙著（早川 2020）をご高覧いただき丁寧なコメントを頂いたことを感謝したい。一点誤解されている点はオーストロネシア語族のインド太平洋への拡散を自論として発表したのではなく、太平洋専門家であれば常識範囲であるドイツで言語学として開始したオーストロネシア語族の拡散こそ「2 つの海の交わり」であると安倍政権のインド太平洋構想に繋げただけで、実のところ私は海洋安全保障専門家として議連に呼ばれたのである（Hayakawa 2018a）。

郭博士からオーストロネシア語族コネクション事業についてアドバイスを求められた。私は以前日本がインド太平洋とオーストロネシア語族研究の中心になるべきと主張していた（Hayakawa 2018b）。しかしオーストロネシア語族である原住民が現在も住み、しかもその拡散の出発点である台湾こそがふさわしいであろうと伝えた。加えて台湾原住民研究を

開始した鳥居龍三、伊能嘉矩、森丑之助等に関する研究も日本より台湾の方が活発であるという。今回伊能嘉矩研究で著名な陳偉智博士ともお会いできた（陳 2014）。原住民の関係性については彼らの国際的祭典参加は大いに支持する。他方オーストロネシア語族とは特定の民族集団というよりも常に植民を続ける人間の行動様式と理解すれば、あえて「コネクト」する必要性はなく、淡々と会話と研究を進めれば良いと思う。2025 年末に国土を失っても海洋境界を永久に認める内容を含む Kaitasi 協定をツバルと締結、即ち「コネクト」した台湾は既存の「国家」概念に囚われない、新たな国際法規範形成を主導する海洋国家としての役割も期待できる。

最後になったが改めて今回の台湾訪問を想像以上に濃い内容にいただいた中央研究院の邱斯嘉博士、そしてチームの皆様に感謝する。

<参考文献>

笠原政治

2022 『台湾原住民族研究の足跡』 風響社

カー、E. H.

2022 『歴史とは何か』 近藤和彦訳 岩波書

篠遠喜彦/荒俣宏

1994 『楽園考古学』 平凡社

張隆志

2021 『この土地この民台湾物語 常設展図録』 国立台湾歴史博物館

陳偉智

2014 『伊能嘉矩——台湾歴史民族誌的展開』 国立台湾大学出版中心

早川理恵子

2020 『インド太平洋開拓史: 二つの海の交わり』 明成社

ベルツ、エルウィン、V

1973 「日本人の起源とその人種的要素」（池田次郎訳）『論集日本文化の起源』五巻、平凡社

矢内原忠雄

1935 『南洋群島の研究』 岩波書店

Bedford, S.

2010 *Lapita peoples: Oceanic ancestors*. Vanuatu Cultural Centre

Chiu, S., Su, Y., Killick, D., Kirch, P., Summerhayes, G. R., Specht, J. and Ambrose, W.

- 2024 Understanding social connections within the Bismarck Archipelago through petrographic and motif analyses of Mussau Lapita pottery assemblages, in Shaw, B., Ford, A. and Gaffney, D. (eds.) *Forty Years in the Field*, pp. 75-107. Canberra: Terra Australia ANU Press.
- Guo, P.
- 2019 Pacific Studies and Comparative Austronesian Studies in Taiwan. *Japanese Review of Cultural Anthropology*. 2019 年 20 卷 2 号 p. 163-201
- Hayakawa, R.
- 2018a *Japan's Oceania Engagement and Maritime Security*. *Asia Pacific Bulletin*. East-West Center.
- Hayakawa, R.
- 2018b The Next Generation of Japanese Has to Learn About the Indo-Pacific. *Japan Forward*.
- Hayakawa, R.
- 2017 Possibility of Telecommunication Universal Service in the Pacific Islands; Case studies of Vanuatu, PEACESAT and USPNNet (Thesis, Doctor of Philosophy). University of Otago.
- Nitobe, I.
- 1912 Japan as a Colonizer. *The Journal of Race Development*, Vol. 2, No. 4 (Apr., 1912), pp. 347-361
- Sand, C.
- 2020 *Ancestors' Heritage: Archaeology of Melanesia*. Institut d'Archéologie de la Nouvelle-Calédonie et du Pacifique



中央研究院でのワークショップ



彰化県の発掘現場



高雄、旗山付近の発掘現場



霧台基督長老教会



霧台鄉魯凱族文物館

